



筑波大学附属図書館ボランティア広報紙

第24号

私の生涯学習

目 次

富岡製糸場と富岡日記	飯島倍雄	1
座右の銘	高田信江	2
生涯を貫く学びのこころ	中島真哉	3
ひょうたんと人の二人三脚	山内 衛	5
老いの楽しみー私のライフワーク	森田 武	7

編集に当たって

今回は生涯学習を大きなテーマとして、ボランティアの人たちが日ごろから考えたり学んだりしていることについて、それぞれの思いをこめて書いていただきました。一人一人の生き方の豊かさを垣間見ていただけたらと思います。なお今回、広報部員の小関美保さんにイラストのデザインでご協力をいただきました。

広報紙「うたがき」は第 17 号から筑波大学附属図書館 Web サイトのボランティアのページに掲載されています。私たちボランティアの活動をより多くの皆さんに知っていただければと願っています。ご興味を持たれた方々のボランティア活動へのご参加を歓迎します。

(広報部員一同)

富岡製糸場と富岡日記

飯島倍雄

私は、筑波大学附属図書館でボランティア活動をして今年で11年が経過した。これだけ継続している理由はいくつかあるが、活動が楽しかったことと、生涯学習の場が与えられていたことである。知りたい知識や情報は様々な手段で得ることができるが、図書館は最も総合的・多面的に情報や知識を得るのに最適である。

平成26年6月「富岡製糸場と絹産業遺産群」（群馬県）が世界遺産に登録されたが、私はこの世界遺産に興味があり、早速図書館の蔵書検索で「富岡製糸場」等をキーワードに検索しながら資料の幾つか興味あるものを読んでみた。特に『富岡日記』に関心をもった。著者は和田（旧姓横田）英子で、旧信州松代藩士の娘である。松代町の区長を勤める父が県から依頼を受けた官営富岡製糸場の工女募集が思うように集まらないため、自ら進んでこれに応募、松代の16名の工女の一人として、明治6年3月から翌年7月まで同製糸場で工女として働いた。この間の製糸場工女の仕事、工場内の様子や私生活の模様を回想記として草稿し（明治41年51歳）、のち『富岡日記』（昭和6年9月編纂者信濃教育会、発行所古今書院）として発行された。

松代に帰ってから、民間企業六工社草創期（明治7年7月～12月）の器械製糸の様子や初売り込み記（大正2年）を脱稿した。後に、『富岡後記』（昭和6年11月）として発行された。

『富岡日記』及び『富岡後記』は、近代日本の胎動期に若き製糸工女がどう生きたかを活写した古典的記録として評価されており、製糸業史、風俗史、女性史、思想史、文学史などに貴重な史実を提供していると言われる。

右の錦絵は『富岡日記』（筑波大学附属図書館蔵書）から転載したもので、上野富岡製糸場の操業中の模様である。

長野県は、群馬県、埼玉県とともに官営製糸場候補の一つでもあり、全国でも有数の養蚕業、製糸業が盛んな地方であった。

私はこの著者と同県人であり、私の実家は父が繭と生糸を商っていたこともあり、官営富岡製糸場の生産や技術が民間にどのように移転され発展し近代化していったかを長野県の製糸業や養蚕業につき史実（資料）に照らし現地を確認しながら学んでみたいと考えている。



筑波大学附属図書館蔵『富岡日記』（請求番号ヒ320-69）口絵



座右の銘

高田信江

計量研究所で、洋書カードを作成する仕事にたずさわった事がありますが、その時、初めて“**The Manhattan Projects**” という小さな本に出会いました。

「ああ、これが、あの広島・長崎の悲劇的大惨事をもたらした本か」と思いました。

我が家の本棚には、『原爆体験記』という本があります。

昭和 22 年、その当時の広島市長浜井信三氏が原爆を直接体験した人たちの手記を集めておく事は大きな意義があると思われて、市民の中からそれを募集されたそうです。百六十余編が集まり、原爆 5 周年に当たって、その一部を小冊子にまとめて印刷しましたが、占領政策によりついに世にだすことができませんでした。その後、原爆 20 周年を迎えるに当たり、朝日新聞社のご尽力により、それが刊行されました。

「この一編が、原子戦争の様相を知るよすがとなり、世界平和確立の助けとなるように心から祈ってやまない。」広島市長の願いです。

本の中には、「なにを記憶し、記憶しつづけるべきか？」という大江健三郎氏による読後感が載せられています。日本国憲法が成立した背景にはこのような歴史の事実があります。大江氏は今、話題の憲法 9 条を守る会のメンバーです。

我が家では、1945 年 8 月 6 日、父方の両親は、原爆投下により焼死し、家もろとも焼けました。お墓に骨はありません。蔵があるから大丈夫、防空壕は「掘らんでええ」と亡くなった祖父は言っていたそうです。No More Hiroshima.

その叫び声が消えようとする昨今、アメリカの GE による原子力発電所が水素爆発をおこしました。電力がなければベントができなかったことも、大きな事故になった原因と思われます。そして、No More Fukushima.

地震。津波。宮沢賢治が生きていた頃も、30m ほどの津波が三陸をおそったそうです。2011 年 3 月 11 日の東日本大震災は、茨城でも大きな被害がありました。開架式をうたい文句にした筑波大学の図書も、もろに被害をこうむる事になり、図書修理のボランティア活動も、盛んになりました。

筑波大学の蔵書には、阪神大震災の被害に関する本も多くあります。天災があるたびに、本を出版し、現実を把握し後世に伝えようとする姿勢に感動します。第一次世界大戦、第二次世界大戦、そして反国家主義的組織によるテロ組織、もう第三次世界大戦に突入しているのかもしれませんが。

今の日本の財産は、平和です。

日本人は、昔から白黒をはっきりさせない国民といわれてきましたが、物事を記録し、出版して、内容を正確に把握して生きるといふ国民性を育てたいと思います。かけがえのない地球（**Only One Earth**）を大切にする日本でありたいものです。



生涯を貫く学びのこころ

中島真哉

「ただいま」と中学から帰ると、居間で私の学校のサブテキスト、日本史年表、世界史年表、日本歴史地図、世界歴史地図などを、ズラッと並べてみている母がいた。「西洋史も東洋史も別々の先生に習ったし、こんな便利なテキストもなかったし、とってもわかりやすい」と興奮気味。また大学生のころ、日本書紀古事記万葉集を文庫本大系本などありっただけ並べてひっくり返していたこともあった。同様の記述違いがあつて、面白いのだ。確かに終戦直後に歴史を学んだ母の蔵書には、おそろしく古めかしい東洋史や西洋史の教科書が残っている。学問といえども、いつまでも新鮮に輝き続ける学問というのは稀有なのだを知る最近だ。大病をして外出できなくなったころ、丁度出版された恩師の著作集『川崎庸之歴史著作選集』をとりよせて読んでいた姿を今も思い出す。仕事帰りのガサガサした気配で帰宅したわたしは、母の静かな読書の姿にはっとしたものだ。その著作集の中の論文が、最近の私の文献サーフィンの波にかかってくる。図書館の資料をコピーして帰ったけれど、参考文献リストの名前が、どこか記憶の中にあつたような気がして探したら、母の蔵書のなかにこの先生の全三冊の著作集を確認できたのだ。歴史と国文、専門分野の違った母のフィールドに思いがけずお邪魔することになった。あ～、辿りつきました、とうとう繋がりましたね、と、話しかける相手はもういないけれど、ちょっと感慨深かった。母とは研究者が社会に果たすべき責任とか、学問の社会的貢献とかの話題で盛り上がっていた。大学図書館を利用するだけでなく、ボランティアをしてみよう、と思いついた、遠いきっかけだったかもしれない。私には死の直前にも論文集を読むような人生はあるだろうか。生涯を貫いて歴史を学び考えた姿勢を間近に見て、意気地なしの私自身にはまったく自信はないけれど、いつも気になる記憶のシルエットだ。

子供の時に受ける教育は、自分がどの方向に歩いていくのかを考えること。『地球の歩き方』ならぬ“自分の道の歩き方”さらに“歩き続け方”ってところか。どんなやり方であれ、自分で自分を育て続ける、これなくして人生は続けられない。学校教育は自己教育の方法を感知するためのものなのだ。卒業は自己教育、生涯学習の始まりと言い換えてもいいだろう。創立者の意向で第一期生の卒業と同時に卒業生の生涯学習を第一義にした同窓会組織を作った母校を持つ身なので、「生涯学習」の言葉は無意識に近い身近な考え方になっている。中学高校のころは、勉強よりも、何を勉強していきたいのか、という点ばかりを悩んでいた記憶が強烈だ。そういう懊悩は結局自分自身を知る、ということになるとは思うのだが、悩んだ結果が、当時熱中していた野坂昭如を現代文学史に位置付け評価する、という野望により国文科希望、というものだった。文学史だ文体論だと騒いでいたが、能力不足で挫折。まあ、高校生が頑張つて考えた限界だった。最近では日本文学の本質の原初を知りたい、という、これまた懲りずに身の丈に合わない

希望で、本歌取りする和歌文学に注目で遡上を続けているところだ。ユーカリしか食べないといわれるコアラほどではないが、私の興味の範囲はとても狭い。教科書で出会った現代短歌一首が心に宿って以来数十年、とぼとぼと歩きつづけていたら、いつのまにか遠い昔の世界へ迷い込んでしまった。相手が大きすぎて歯が立たないけれど、急いでないし、やめる理由はないので少しずつだけれど継続中。夜半に吹く嵐の日付を知らざれば明日も花問う心づもりで、などと下手くそな本歌取りを呟きつつ。急ぐべきなのか、急がなくてよいのか、知らぬまま、昨日今日とは思はざりしを、とつぶやくのだろう。

高校生のころ、大学生になったら、石坂洋次郎の青春小説のような大学生生活がポンと降りかかってくるのかしら、と思っていたけれど、実際はさらに大忙し、学校を出たら、それまでの勉強を元手に働くのかしら、と思っていたのに、自転車操業のように勉強していないと、何十人もの生徒を前に授業を続けることはできない、学生時代より、さらに激しく勉強しないと成立しない世界だった。学生のころは、評価されるのは年に何回かの機会しかないけれど、仕事では、毎日の仕事すべてが評価される。厳しさには格段の差がある。そんなことになっているとは、仕事を始めた後になって知ったなあ。でもそれらはいつも直近の必要に迫られた勉強。今は自由に興味のある方面に無制限にのめりこむことができ、結果や見返りなく、ただもう知りたいだけで動いている。もりもりと参考文献を食べていると、絶対的に次に、それでなくてはならないものが出てきて、本学図書館にないと国会図書館まで遠征したり、他県の図書館から借りたりしている。どこから湧いてくるのか、好奇心の力は意外と強い。図書館利用者として率先して利用活用に励んでいるので、微力でも若い新人学生の図書館利用の手助けなどして、一日の長の社会貢献になれているといい。とはいえ日進月歩の歩みの早い時代で、次々更新されていく機能に追いついていくだけでも大変です。

ところでボランティアでかかわる以前の私と本学とは、小さな繋がりが少しだけある。それは高校の恩師や同級生が本学に奉職していたり、といった程度のことなのだが、最初の小さな小さな縁は実は筑波大学の前身校、東京教育大学の時。家永裁判のとき、母はクラスメイトの応援署名を代表で研究室に持参したのだ。しかし、先生の第一声は「東京女子大は遅い！」だったそうだ。卒業すること十年余、いくら奉仕と犠牲が校是でも、みな仕事に結婚、家事、育児で自由のきかない身の上の女性が、恩師とはいえ裁判の支援署名を集めてまとめるのが、どんなに大変なことか、まったくわかっていない、とかなり怒っていた。ふ〜ん、そうなのか、と、こんなエピソードと教育大とが私の中で繋がって沈んでいった。そんなことを聞いていた私が、まさか 30 年後に筑波大学の図書館に潜入しようとは、その上そこで 20 年も沈潜しようとは、想像もしていなかった。学生として在学したことはないけれど、人生の三分の一も通ったら、もうなんだか、自分のことのようにだ。小さいころの「本屋さんになりたい」という、少女にありがちな希望は、こういうかたちで叶ったのかもしれない。

ひょうたんと人の二人三脚

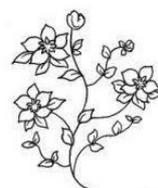
山内 衛

私が、たまたまひょうたんと人間の深い関わりを知り、それが生きてきた世界に、自身の人生と比して共感を覚えるものがあり、ひょうたんを主材に書いてみました。きっかけは、平成 27 年 8 月、私が毎朝の日課として犬をつれて散歩中、近所の雑木林の一本の木に、長さ 40cm くらいのひょうたんがくくりつけられているのを見かけました。なんとなく人間の姿にも似ているし、愛嬌のある姿に惹かれて、手持ちのデジカメで撮ったのが右の写真です。



その後、ラジオ放送で、ひょうたんほど人間とかかわりの深い有用な栽培植物はないとの話に興味をもち、ボランティア活動をしている筑波大学附属図書館で検索した『ヒョウタン文化誌：人類とともに一万年』（湯浅浩史著、岩波新書、2015 年発行 請求番号 081-I95-R1564）で調べてみました。

ひょうたんは、ウリ科、一年草のつる植物、起源はアフリカ説が有力と言われ、夏に白い花を咲かせます。白い花を咲かせる同じ仲間のユウガオの中で、大型のものは寿司でおなじみのかんぴょうとして用いられます。同じウリ科でも、キュウリやカボチャの花は黄色です。ハロウィーンでおぼけカボチャとともに、小さいひょうたんに似た子どもカボチャも登場しますが、いずれもウリ科の仲間です。ひょうたんのひょうたんたる所以はあのくびれ（大型から小さい千成ひょうたんなど）ですが、ひょうたんには棒状、鶴首、夕顔、イボ型など様々な形状もあり、型から系統を追うのは難しいようです。理由は、どのタイプの間でも「交雑」が可能で、その子孫に多様な形が分離して出てくることにあります。一般的には、巨大ひょうたんをつくるなら大×大であり、大×中では、両者のほぼ中間の大きさになるなど、家系の要因により左右されるのがひょうたんです。「瓢箪」の呼び方について中国では「箪」はいわば弁当箱、「瓢」は飲み物などを入れるいわゆるひょうたんの容器として使い分けていました。それが日本では後に、間違っ「瓢箪」を一つのことばとしてしまったようです。木器用などの「なりひさご」「ひさこ」などという古文ではおなじみの名も使われてきました。「ひょうたん」の名が一般的に用いられはじめたのは、室町時代『下学集』で瓢箪を「へうたん」と訓じ、『節用集』にも同様であったのが、江戸時代を通して使われ、ひょうたん（へうたん）の名が俗称として一般化する一因になったと推測されます。



志賀直哉の「清兵衛と瓢箪」でも、へうたんとルビがふってあります。高校生のころに読んだ「清兵衛と瓢箪」（大正元年作、翌年読売新聞に発表）は、「これは清兵衛と云ふ子供と瓢箪（へうたん）との話である」の書き出しで始まり、主人公が子どもながらもひょうたんに惹かれ、暇さえあればひょうたんの手入れをしていたという短編小説です。

アフリカが起源と推測されるひょうたんには不思議なことが多く、人類との関わりにおいても、遺跡から出土したひょうたんの遺物を炭素 14 で年代測定したもっとも古いものでは、アメリカ、メキシコ、日本などでは、およそ一万年前後となっています。ひょうたんが最古の栽培植物とされる所以です。多くの国の神話などでひょうたんにまつわる話が多いのも、そのためかもしれません。



今回、実際に瓢箪を栽培・作品化している「ひょうたん美術館」（小美玉市～写真上）と個人愛好家宅（牛久市～写真下）を訪問する機会を得ました。皆さんが異口同音に話されたのは、種子保存、栽培、施肥、害虫対策、成熟実から種や中身の取り出し、乾燥、におい、ひょうたんの手入れや作品化など、大変なご苦労があることです。また、ひょうたん愛好家が、県内をはじめ、全国に多く存在すること、各地でマニアの集まりがひらかれることや、つくば市内には、著名なひょうたん専門家がおられることも知りました。近年プラスチックに押されてひょうたんの需要が減っています。

ところで前方後円墳の形がひょうたんに似ているように思うのは考えすぎでしょうか。

さて、ひょうたんと人の関わり合いは一万年などと書いてはみたものの、ちかごろの小生は、「五十にして四十九年の非を知る」（淮南子・原道訓）～人生には失敗が多く、反省することばかり～の心境です。

ともあれせつかくこの世に生をうけたからには、「Freut euch des Lebens」（人生は楽しき哉～ドイツ）の気持ちをいつまでも持ち続けたいものです。



老いの楽しみ—私のライフワーク

森田 武

松尾芭蕉について、企業在職中から山梨大学の伊藤洋先生に助言・指導を受けながら、『野ざらし紀行』、『笈の小文』、『更科紀行』、『鹿島紀行』、『奥の細道』など全国の芭蕉の縁の地や句碑等を撮影し、先生のHP「芭蕉DB」に約1000点を掲載しています。芭蕉に関してより深く勉強するため、『七部集』や『文庫』（別書名：『芭蕉庵小文庫』）などの貴重な和装本や、関連資料を豊富に所蔵している筑波大学附属図書館で、ボランティアをしながらライフワークとしてこれに取り組んで行こうと考えました。縁の地へ行くためには、書籍や関連資料の事前調査は必須です。特に奥の細道は、曾良の随行日記により、何時、何処を通ったかが全て判りますので、その時刻に合わせて何度も現地を訪ねて写真を撮ったので、7年間約2万キロの行程を踏査することになりました。

また、大学の資料を活用し「南北朝動乱」に関しても勉強を始めました。動機は、『神皇正統記』や『職原鈔』を著した北畠親房が、最後に立て籠もって戦った関城が、私の生家の直ぐ近くに有ったこと。親房が白河藩主の結城親朝に出兵来援を促した御教書や書状は、天和3年(1683)4月に佐々宗純(介三郎)が蒐集し、南朝正統の史観を堅持する南朝最員の水戸光圀の目にとまり、『大日本史』に取り上げられ、水戸学の根本となりました。この御教書や光圀から謝礼の羽織1領、及び宗純自筆の書状を保持していたのは、結城親朝の血を引く須賀川駅長であった相楽等窮です。今はその末裔の相楽節子さんが相楽家蔵結城文書として所蔵しています。書簡集と宗純自筆書は昭和53年に村田正志が再発見し、世に公表され国の重要文化財に指定されました。また親房の書状の一とされているものに「関城書」があります。これは親房が北朝軍の高師冬や南軍から敵方に寝返った小田治久等に関城を包囲され、今や危急存亡の城中から親朝へ、忠孝の大義を説き、最後の来援を促したと云われる獲麟の書です。幕末には、勤皇の志士の間で回し読みをしたとも伝えられています。しかし、江戸時代に中山信名は「関城書考」（『史籍雜纂』3所収）で、白河藩主の榊原忠次が親房の御教書や書状を参考に新しく作成した偽書であると説きました。これに対し平泉澄は「関城書弁護」で数々の証拠を挙げてこれが親房の自筆書であると証明しました。いずれにしても、この「関城書」は南北朝の凄まじい動乱が私の実家の指呼の距離で起った事実であることを実感させ、南北朝動乱の実態を知る上で大変興味のある歴史的な古文書でした。

さて、宗純が相楽家を訪問した6年後の元禄2年5月、芭蕉も奥の細道で相楽家に7日間逗留し発句に「風流の初やおくの田植えうた」と詠み、句会の連中として紀行中唯一敬語を使い等窮と交流しました。ここで、奇しくも、時代を超えて私のラ



イフワークたる芭蕉と南北朝動乱の接点があったのでした。相楽節子さんには、奥の細道の調査中に大変お世話になりました。残念ながら一昨年3月に私に最後の便りを呉れた一ヵ月後に亡くなり、等窮と一緒に墓に入っておられます。今ではその手紙は私の何よりも大切なものになっています。

『大日本史』については、『大日本史料』に詳しく解説されていますが、残念ながら相楽結城文書の所蔵を「楓軒文書」としてしています。『楓軒文書纂』を見ると、奥書に水戸彰考館員の小宮山楓軒によって、宗純が相楽家から拝借した書簡を謄写したものと記述されています。その他の文書については、例えば「松平伯爵本」のように所有者を明記していますが、相楽結城文書については筆記者の名前で記載しているのは、帝国大学編纂室の恣意的なものか、民間人の所蔵故か疑問が残るところです。また『神皇正統記』は石川県白山比咩神社に国の重要文化財として所蔵されています。何度も白山神社に通い、学芸員の伊藤克江さんに神皇正統記のコピーや大量の史料を頂き、大変参考になりました。

生涯学習として取り組んだ、松尾芭蕉と南北朝動乱は、相楽家という意外なところで関係していました。しかし、両者を関連付けて調査・研究している学者や専門家が意外と少ないことに気づきました。平泉澄『芭蕉の俳』も相楽結城文書等と関連づけては記述していません。

昨年は、南北朝及び北畠親房終焉の地、奈良の賀名生行宮や親房の霊廟にも足を運びました。筑波大学附属図書館は、生涯学習をする上では、汲めども尽きぬ泉のようです。これからも「老いて学べば則ち死して朽ちず」と云われるので体力の続く限りボランティアと生涯学習をしていくつもりです。



ふみわけてとふ人あらばふりつもる 雪より深き跡はみてまし 北畠親房

南北朝動乱に関して参考にしたもの

- ・近藤瓶城『櫻雲記』1882(史籍集覧) 中央和装 ㊦ 130-22
- ・佐藤和彦, 小林一岳編『南北朝内乱』東京堂出版, 2000(展望日本歴史:10) 210-Te35
- ・梅橋散人校訂. [制作者不明]『櫻雲記』上, 中, 下 1759 中央和装 ㊦ 380-55
- ・村井章介編『南北朝の動乱』吉川弘文館, 2003, (日本の時代史:10) 210.1-N77-10

北畠親房に関して参考にしたもの

- ・岡野友彦『北畠親房：大日本は神国なり』ミネルヴァ書房, 2009(ミネルヴァ日本評伝選) 289-Ki61
- ・北畠親房著/平泉澄編纂『神皇正統記』三秀舎, 1933 中央和装 ㊦ 380-633

- ・国書刊行会編『史籍雑纂』国書刊行会, 1911-1912 イ 300-36, イ 300-37 他
- ・小宮山昌秀編『楓軒文書纂』国立公文書館内閣文庫, 1982 (内閣文庫影印叢刊) 中央 210.088-Ko65
- ・佐藤和彦他編『南北朝遺文』関東編 東京堂出版, 1980 210.45-N48
- ・東京帝國大學文科大学史料編纂掛編纂『大日本史料』東京帝國大學, 1901 210.088-To46,
- ・東京大学史料編纂所編『大日本史料』[覆刻版]東京大学出版会, 1971 210.08-To46
- ・平泉澄「関城書弁護」(『伝統』所収 至文堂 1940年1月/原書房 1985年5月)
- ・村井章介研究代表『中世東国武家文書の成立と伝来に関する史料学的研究：陸奥白河結城家文書を中心に』2007.3 210.46-Mu41
- ・村井章介編『白河結城家文書集成』高志書院, 2009 210.46-Mu41
- ・村田正志「相楽家蔵結城文書の概要及び解説」(『村田正志著作集』第6巻 思文閣出版, 1985 210.08-Mu59)
- ・横井金男『北畠親房文書輯考』大日本百科全書刊行会, 1942 コ 214-180, コ 214-182

図書館ボランティアについて

図書館ボランティア

筑波大学は開かれた大学として地域社会との融和を図っております。その努力の一つとして1995年6月1日には全国の国立大学に先駆けて図書館ボランティア制度を発足させています。

図書館ボランティアはつくば市およびその周辺に住む家庭の主婦、定年退職者などから選ばれており、現在約50名近くの図書館ボランティアが活動しています。いずれも生涯学習に大きな関心を持ち、ボランティア活動に熱心であり、豊かな人生経験と教養を備えた人々であります。図書館ボランティアはその活動を通じて、開かれた大学としてのイメージを高め、図書館サービスの向上に、地域社会との融和に貢献しております。

図書館ボランティアはおもに中央図書館で活動し、2階・4階ボランティアカウンターを定位置としております。

その主な活動は：

- 1) 図書館総合案内
館内窓口案内、資料配置案内、資料探索案内、端末機操作案内、各種申込記入案内、身体障害者や日本語に不慣れた外国人へ図書館利用支援。
- 2) 対面朗読
視覚障害者のための対面朗読、館内での資料探索支援。
- 3) 利用環境整備
中央図書館及び体育・芸術図書館各階の書架の整理、図書修理、図書ラベルの貼り直し、など利用者が使いやすい環境を整える。
- 4) 体育・芸術関係資料の整理
美術展ポスターなどの整理。
- 5) その他
外国人のための日本文化紹介、留学生オリエンテーションの補助、図書館見学案内。

などです。

上記1)図書館総合案内および3)利用環境整備のため、図書館ボランティアは毎週、月～金の5日間、午前(10時～13時)、午後(13時～16時)に分かれて活動しています。

視覚障害のある方には上記2)対面朗読など、訓練されたボランティアによる支援を行っています(予約が必要)。

留学生の皆さん、図書館を利用されるにあたって、わからないことがあれば、ご遠慮なく図書館ボランティアに相談してください。

図書館ボランティアは喜んでお手伝いします。

May, 2006

ON THE LIBRARY VOLUNTEERS

Prepared by Volunteer

The University of Tsukuba has been maintaining its policy to be friendly to the public, and maintain good relationship with the local community. As one of its efforts toward that objective, the University took a lead to adopt a library volunteer system. The system was started on the first of June 1995, which was said to be the first one among the national universities in Japan.

The number of library volunteers is nearly 50 persons. The system is mainly organized with housewives and retired persons who are living in Tsukuba City and its vicinity. They are having a continued interest on life-long learning, and are well experienced in their lives with good common sense.

It is believed that efforts of these volunteers have contributed for maintaining friendly images of the University and good relationship with local community. Furthermore it brought a lot of improved services of the Library as well.

The library volunteers are generally stationed on the 2nd and 4th floor of the Central Library of the University. Their major missions are:

- 1) General Information Service on the Library:
on general information, on document layout information, assist document search, assist PC-terminal operation, assist filling out various application forms, assist handicapped persons and foreign visitors
- 2) Assist Sight -handicapped Persons:
assist document retrieval and readout these for them
- 3) Maintain Library Environment (Shelf Reading):
check arrangement of books on shelves and their "call number tags" (light maintenance work on books to keep the library environment friendly to users)
- 4) Restore Materials in the Arts and Physical Education Library:
- 5) Others:
introduce Japanese cultures to foreigners, assist library orientations for foreign students, library tour guide

On weekdays, from Monday through Friday, the service of volunteers is done in two shifts, that is, morning shift (10:00 to 13:00) and afternoon shift (13:00 to 16:00).

For sight-handicapped persons, services by specially trained volunteers for the above item 2 is available when requested. (Reservation is needed.)

Whenever any question comes out in your mind, please feel free to contact volunteers at the Volunteer Counter on the 2nd and 4th floor. They are willing to help you.

うたがき

筑波大学附属図書館ボランティア広報紙

第24号

私の生涯学習

平成28年3月発行

編集：筑波大学附属図書館ボランティア広報部

発行：筑波大学附属図書館

〒305-8577

茨城県つくば市天王台1-1-1

TEL:029-853-2348 (情報管理課)